

印 東 昌 綱

ともし火のはかげも白む明方に

水鶏の聲ぞちかくきこゆる

佐々木信綱

うばらさく里の垣根も見初めて

明行く小田に水鶏なくなり

鈴 虫

ろ す い

燈火消え、坪にもたらぬ中庭に、たゞずめりけり、
下宿の下婢、田舎育ちのいやしき風情にも、何や
ら、ものおもひげなりけり、

「なにしてや

「山里ならぬ都の住ひ、夏のあつさをすいむし

の、こゝにも聲の、聞ゆるぞかし

「鈴虫の聲、何とさくや

「うらめしく

「なごてうらめしくは

「田舎の事、思ひ出して

「田舎といふは

「君、知り玉はずや、甲州、あの、吉田の里を

……

「吉田に父ありや

「否なとよ、五年むかしに

「愛の母ありや

「去年の霜月、あえなくも……

「さあらは誰を……戀しとてにや……可愛

の夫を……

「オホ、ツ

と笑ひて、厠の蔭に、姿かくしきさ、